

## 第6章 高等部専攻科

### I 結果と考察

#### 1. 回答した教員の属性についての回答

##### 1) 教員の属性

教員の年齢に対する回答（26件）では、平均年齢44.7歳で、最小値24歳、最大値58歳であった。また教員歴は、平均値19.2年で最小値2年、最大値33年であった。特別支援学校（聴覚障害）での指導歴は、平均値11.7年で最小値1年、最大値30年であった。特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導経歴は、平均値9.6年で最小値0年、最大値30年であった。特別支援学級（難聴）ないし通級指導教室（難聴）での指導歴を有する者はいなかった。通常学級での指導歴は、平均値1.0年で最小値0年、最大値16年であった。

##### 2) 人工内耳装用生徒の指導にあたって学習したい研修内容

人工内耳装用生徒の指導にあたって学習したい研修内容に対する回答（19件）では、「基礎的研修」が10件（58.8%）で最も多かった。次いで、「関連機関からの情報」で4件（23.5%）であった。「維持・管理」は3件（17.6%）、「言語指導や学習事項に関する事項」は2件（11.8%）であった。これらは、高等部本科と同様の傾向であった。一方、高等部本科に見られた人工内耳の言語や心理の発達に関する回答はなかった。

#### 2. 人工内耳装用生徒が在籍する学級について

##### 1) 担当生徒数

「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体の担当生徒数は、平均で3.6人であった。うち人工内耳を装用している生徒は、平均で1.7人（標準偏差1.0）であった。

##### 2) 医療機関との連携の有無

医療機関との連携の有無について、高等部専攻科全体では回答数が26件、無回答は0件であった。うち、連携ありとの回答は、2件で全体の7.7%、連携なしとの回答が24件で全体の92.3%であった。連携ありと回答があったのは、いずれも「重複なし」だった。以上のことから、医療機関と連携している学校は、ほとんどないことがわかった。連携の内容は、学校での聞こえの様子を言語聴覚士に伝えるというものであった。

#### 3. 人工内耳装用生徒の指導について

##### 1) 補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点

補聴器装用児と比べて、指導上、特に課題と感じている点に関する記述回答（23件）を分類し、表6-1に示した。「特になし」とする回答が最も多く、補聴器装用生徒と同様の課題が人工内耳装用生徒にも存在することが伺われた。次いで、人工内耳に関する基礎的知識や管理方法の本人及び保護者に対する指導と聞き間違いや聞き漏らしがあることの認識と指導が多く、この点も補聴器装用生徒の課題と共通するものと思われる。

表6-1 補聴器装用生徒と比べて、指導上、特に課題と感じている点の分類と回答数

分類	回答数(件)
人工内耳に関する基礎的知識や管理方法の本人及び保護者に対する指導	5
人工内耳を使わない	1
聞き間違いや聞き洩らしがあることの認識と指導	5
行動上の制約がある点	2
最適な大きさの音の提示の仕方	1
特になし	9

## 2) 補聴器装用の生徒と比べて、指導上工夫している点

表6-2に補聴器装用生徒と比べて、指導上工夫している点に関する記述回答（21件）の分類と回答数を示した。聴覚や口話を主に使うという回答が多く、人工内耳装用生徒の聞こえの良さを生かした指導を心掛けていることがうかがえる。ただし、ことばを正しく受信できているか、話された内容を理解できているかの確認については、視覚的手段である文字や指文字を用いる工夫をしていることがわかった。また、衝撃への対策、人工内耳の装用側から話しかけるなど指導上の工夫や、安全面への配慮もなされていることが示された。加えて、「特になし」とする回答も多く、補聴器装用生徒と同様の工夫がなされていることが示唆される。

表6-2 補聴器装用生徒と比べて、指導上工夫している点の分類と回答数

分類	回答数(件)
聴覚や口話を主に使う	4
文字や指文字の利用による理解の確認	3
音声と手話を併用する	3
人工内耳装用方向からの話しかけ	1
簡単な言葉で話す	1
発音・発語の正確さを求める	1
衝撃への対策	1
人工内耳の管理に関する知識	1
特になし	6

## 3) 補聴器装用の生徒と比べて、指導しやすい点

表6-3に補聴器装用生徒と比べて、指導しやすい点の回答（21件）の分類と回答数を示した。音や言葉の反応の良さが最も多く、語彙数の多さ、コミュニケーションの良さ、指導できる語の多さに関連しているものと思われる。人工内耳の装用が、言語やコミュニケーションの力を高め、教師の指導の幅を広げていることがうかがえる。一方で、「特になし」の回答も特に多く、人工内耳の装用は、音や言葉の受信には効果が高いものの、聞こえの改善のほかの教育的目標においては、課題が多いということがうかがえる。

表6-3 補聴器装用生徒と比べて、指導しやすい点の分類と回答数

分類	回答数(件)
音や言葉に対する反応の良さ	7
語彙数の多さ	2
コミュニケーションの良さ	3
指導できる語の多さ	1
その他	1
特になし	7

#### 4. 対象生徒について

##### 1) 年齢

生徒の年齢は、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、平均値が19.33歳、最小値18歳、最大値23歳であった。

##### 2) 受診時年齢

受診時の年齢について「重複なし」と「重複あり」を加えた高等部専攻科全体では、平均値1.13歳、最小値0歳、最大値6歳であった。1歳までに22人(52.4%)、3歳までに26人(62%)の者が受診していた。ただし、高等部本科同様に無回答の割合が35.7%と高く、生徒の受診年齢を高等部専攻科教員が把握していない可能性が示唆される。

「重複なし」の1年生は1歳未満が5人(29.4%)、1歳が3人(17.6%)、2歳1名(5.9%)、3歳2名(11.9%)、無回答6名(35.3%)であった。2年生では、「重複なし」の2年生は1歳未満が4人(25.0%)、1歳が6人(37.5%)、2歳1名(6.3%)、5-9歳1名(6.3%)、無回答4名(25.0%)であった。3年生では、無回答2名(100%)であった。「重複あり」の1年生では、3名の回答があり、1歳未満1名、1歳1名、無回答1名であった。2年生では1歳未満が1名、無回答が1名であった。

以上のことから、対象生徒の受診年齢は、重複の有無にかかわらず1歳までの回答が多いことがわかり、この傾向は高等部本科と同様であった。

##### 3) 人工内耳の装用状態

対象生徒の人工内耳装用状態について、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では右耳装用が29人(69%)、左耳が11人(26.2%)、両耳装用が2人(4.8%)であった。「重複なし」の1年生では、右耳が11人(64.7%)、左耳が5人(29.4%)、両耳装用が1人(5.9%)であった。2年生では、右耳が12人(75%)、左耳が3人(18.8%)、両耳装用が1人(6.3%)であった。3年生は、左耳が2人(100%)、「重複あり」の1年生では、右耳が2人(66.7%)、左耳が1人(33.3%)であった。2年生では右耳が2人(100%)であった。

また「片耳装用の場合、もう一方の耳への補聴器装用の有無」については、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、「あり」が17人(40.5%)、「なし」が23人(54.8%)であった。「重複なし」の1年生では、「あり」が7人(41.2%)、「なし」が9人(52.9%)、2年生で「あり」が6人(37.5%)、「なし」が9人(56.3%)、無回答が1人(6.3%)であった。

%)であった。3年生は、「あり」が2人(100%)であった。「重複あり」の1年生では、「あり」が2人(66.7%)、「なし」が1人(33.3%)であった。2年生は、「あり」が1人(50%)、「なし」が1人(50%)であった。

「学校での補聴援助システム使用の有無」の問いに対しては、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、「あり」が7人(16.7%)、「なし」が34人(81%)であった。「重複なし」では、1年生で「あり」が1人の5.9%、「なし」が16人の94.1%、2年生では「あり」が4人の25%、「なし」が11人の68.8%、無回答が1人の6.3%であった。3年生では、「あり」が2人の100%であった。「重複あり」の1年生では、「なし」が3人で100%、2年生では、「なし」が2人で100%であった。

以上のことから人工内耳の装用状態については、片耳装用が多かった。また人工内耳の反対側に補聴器を装用している者の割合が多かった。補聴援助システムの使用があるとの回答数は少なかった。

#### 4) 人工内耳装用開始時期

人工内耳装用開始時期について「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、平均値5.48歳、最小値0歳、最大値18歳であった。1歳までに装用した者はなく、2歳で10人(23.8%)、3歳で9人(21.4%)、4歳4人(9.5%)、5-9歳5人(11.9%)、10歳以上5人(11.9%)、無回答9人(21.4%)であった。無回答の割合が、他の問いと比較して高く、高等部専攻科の生徒の人工内耳開始年齢について、受診の年齢同様に高等部専攻科教員が把握していないことが示唆される。

表6-4に重複ありと重複なしの人工内耳の装用開始年齢の数と割合を示した。学年や重複ありなしでの明らかな傾向が認められなかった。

表6-4 人工内耳装用開始時期 ( )内は%

重復の有無 学年 年齢	重複なし 平均値5.3歳、最小値2歳、最大値18歳			重複あり 平均値6.81歳、最小値32歳、最大値17歳	
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生
	1歳未満	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1歳	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
2歳	3 (17.6)	6 (37.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
3歳	6 (35.3)	1 (6.3)	0 (0)	1 (33.3)	1 (50.0)
4歳	0 (0)	2 (12.5)	1 (50.0)	1 (33.3)	0 (0)
5-9歳	2 (11.8)	3 (18.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
10歳以上	2 (11.8)	0 (0)	1 (50.0)	1 (33.3)	0 (0)
無回答	4 (23.5)	4 (25.0)	0 (0)	0 (0)	1 (50.0)
計	17	16	2	3	2

#### 5) 手術前の平均聴力レベル

手術前の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、

右耳114dBで標準偏差は8.61、最小値が100dB、最大値が126dBであった。左耳97dB、標準偏差は29.4、最小値が23dB、最大値が122dBであった。

表6-5に学年別に「重複なし」、「重複あり」に分類した結果を示した。重複のありなしにかかわらず、ほとんどの学年でいずれも100dB周辺の聴力であった。

なお、手術前の平均聴力レベルの回答の値の中には、正確に測定されなかったか、記入を誤ったか、いずれかによるとと思われるものが見られた。

表6-5 手術前の平均聴力レベル ( ) 内は、標準偏差

	重複の有無		重複なし				重複あり				
	学年	1年生(回答6)		2年生(回答右2左1)		3年生(回答無)		1年生(回答1名)		2年生(回答無)	
	耳の左右	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
		113	108	114	112	—	—	120	90	—	—
平均聴力レベル		(10.5)	(8.1)	(1.4)	(0)	—	—	(0)	(0)	—	—
最小値		100	100	81	112	—	—	120	90	—	—
最大値		126	122	134	112	—	—	120	90	—	—

## 6) 現在の平均聴力レベル

現在の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、右耳は54dBで標準偏差は37.6、最小値が13dB、最大値が120d、左耳は47dB、標準偏差は31.3、最小値が20dB、最大値が117dBであった。表6-6に学年別に「重複なし」、「重複あり」に分類した結果を示した。いずれも回答数が少なく、重複有無の違いや学年による傾向を読み取ることはできない。

表6-6 人工内耳又は補聴器装用下での平均聴力レベル ( ) 内は、標準偏差

	重複の有無		重複なし				重複あり				
	学年	1年生(回答10)		2年生(回答7)		3年生(回答0)		1年生(回答2)		2年生(回答右2左1)	
	耳の左右	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
		51	40	70	46	—	—	72	78	36	75
平均聴力レベル		(37.6)	(30)	(41.2)	(33.7)	—	—	(53)	(42.3)	(7.1)	(0)
最小値		20	20	19	22	—	—	35	46	31	75
最大値		117	117	120	100	—	—	110	110	41	75

人工内耳または補聴器を装用していない耳の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、平均値が107dB、標準偏差10.4、最小値84dB、最大値127dBであった。「重複なし」の1年生では、9件の解答があり、平均値は109dB、標準偏差が11.4、最小値97dB、最大値127dBであった。2年生では、解答が7件あり、平均値が111dB、標準偏

差5.4、最小値100dB、最大値115dBであった。3年生は回答数が1件であり29dBであった。「重複あり」の1年生では回答がなかった。2年生では回答が2件あり、平均値が95dB、標準偏差が1.4、最小値が94dB、最大値が95dBであった。

表6-7 重複する障害種とその数及び割合（ ）内は%

障害種	学年	
	1年生 (回答数3)	2年生 (回答数2)
視覚障害	1 (33.3)	0 (0)
知的障害	0 (0)	2 (100)
肢体不自由	1 (33.3)	0 (0)
病弱・身体虚弱	0 (0)	0 (0)
その他	2 (66.7)	0 (0)
無回答	0 (0)	0 (0)

### 7) 重複障害の有無

重複障害の有無については、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体（回答数42件）では「重複なし」が37件で88.1%、「重複あり」が5件で11.9%であった。この割合は概ね高等部本科と同様であった。表6-7に重複する障害の種別の数と割合を学年別に示した。いずれの学年も解答数が少なく、傾向を読み取ることはできない。

### 8) 普段使用するコミュニケーションモード（複数回答可）

生徒が普段使用するコミュニケーションモードについては、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、42件の回答があった。図6-1には、コミュニケーションモードの種類と割合を示した。その結果、手話、音声、指文字を中心として、読話やキューサイン、筆談も利用されていることがわかった。この傾向は、高等部本科と同様であった。

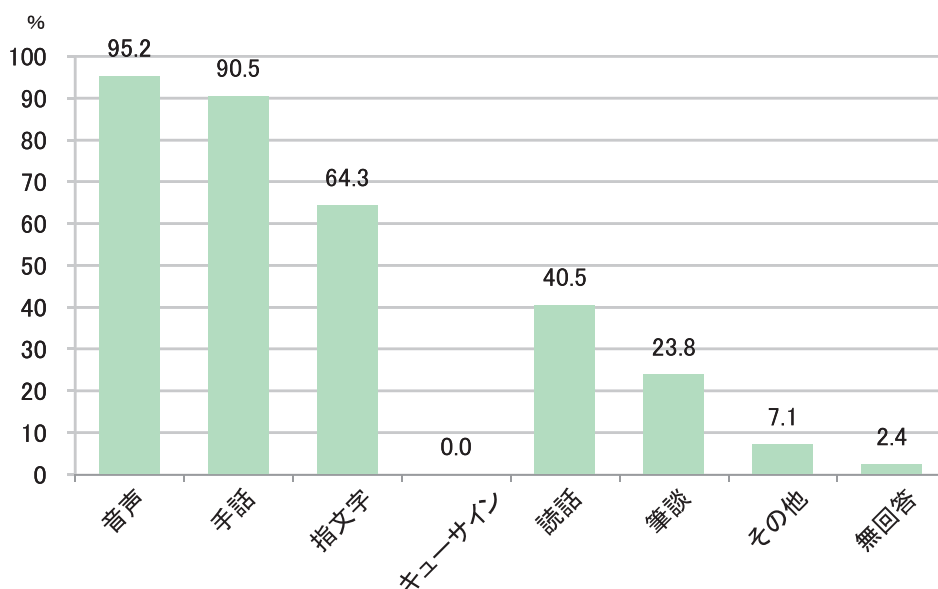


図6-1 生徒が普段使用するコミュニケーションモード  
高等部専攻科全体

表6-8に学年別に重複ありなしの結果を示した。両者のいずれの学年でも手話と指文字の使用率が高い。その他の使用割合については、学年による違いが大きく、一定の傾向を見いだせなかった。

表6-8 生徒が普段使用するコミュニケーションモード ( ) 内は%

モード	重複なし			重複あり	
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生
音声	16 (94.1)	16 (100)	2 (100)	3 (100)	2 (100)
手話	15 (88.2)	15 (93.8)	2 (100)	3 (100)	2 (100)
指文字	14 (82.4)	7 (43.8)	2 (100)	3 (100)	0 (0)
キューサイン	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
読話	10 (58.8)	4 (25.0)	0 (0)	2 (66.7)	0 (0)
筆談	5 (29.4)	3 (18.8)	0 (0)	2 (66.7)	0 (0)
その他	0 (0)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
無回答	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
回答数	17	16	2	3	2

#### 9) 上記のコミュニケーションモードの中で、学校での学習時に用いるもの

図6-2に「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体における各コミュニケーションモードの割合を示した。回答数は、42件であった。主として音声と手話が使用され、普段使用するコミュニケーションモードよりは、この2者の割合が高かった。このことは、高等部本科と同様であった。

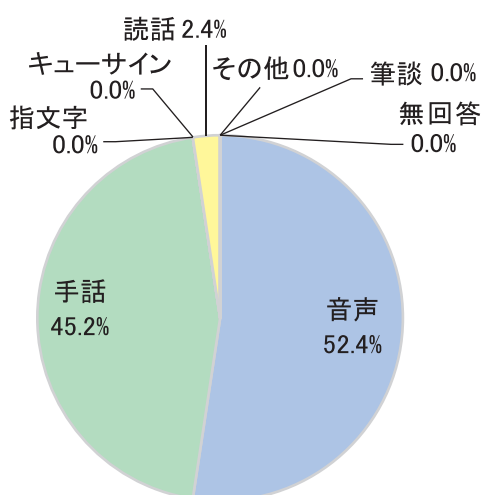


図6-2 学習時に用いるコミュニケーションモードの第1番目 (高等部専攻科全体)

表6-9に学習時に使用するコミュニケーションモードの中で、第1番目として挙げられたモードの数と割合を学年別に「重複なし」、「重複あり」に分けて示し、表6-10には第2番目として

表6-9 学習時に使用するコミュニケーションモードの第1番目 ( ) 内は%

モード	重複の有無			重複あり		
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	
音声	8 (47.1)	9 (53.6)	2 (100)	1 (33.3)	0 (0)	
手話	8 (47.1)	7 (43.8)	0 (0)	2 (66.7)	2 (100)	
指文字	0 (0)	3 (18.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
キューサイン	1 (5.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
読話	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
筆談	0 (0)	2 (12.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
無回答	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
回答数	17	16	2	3	2	

表6-10 学習時に使用するコミュニケーションモードの第2番目 ( ) 内は%

モード	重複の有無			重複あり	
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生
音声	8 (47.1)	3 (18.8)	0 (0)	1 (33.3)	2 (100)
手話	7 (41.2)	8 (50)	2 (100)	1 (33.3)	0 (0)
指文字	1 (5.9)	3 (18.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
キューサイン	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)
読話	1 (5.9)	0 (0)	0 (0)	1 (33.3)	0 (0)
筆談	0 (0)	2 (12.5)	0 (0)	0	0 (0)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)
無回答	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)
回答数	17	16	2	3	2

挙げられたモードの数と割合を示した。音声と手話が主に用いられていることは、高等部専攻科全体の傾向と同じであった。その他に特に顕著な傾向は見られなかった。

#### 10) 家族構成について (きょうだい、聴覚障害者の近親者の有無)

家族構成について、きょうだいがありと回答したのは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体で、全回答数42件のうち32件が、「あり」と回答し、これは全体の83.3%であった。また、「重複なし」では、1年生は回答17件のうち「あり」が15件(88.2%)、2年生では回答数16件のうち13件(81.3%)、3年生では2件(100%)であった。「重複あり」の1年生では、回答数3件のうち、「あり」が2件(66.7%)、2年生では2件(100%)であった。家族構成の「きょうだい」については、学年、重複のありなしにかかわらず、きょうだいがいるという回答が多く、これは高等部本科の傾向と同様であった。

「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体で近親者に聴覚障害者が有り」と回



答したのは、全回答数42件のうち4件で、9.5%であった。また「重複なし」では、1年生は0%（回答数17件）、2年生では2件（12.5%）、3年生では2件（100%）であった。「重複あり」の1年生では、0%（回答数3件）、2年生も0%（回答数2件）であった。家族構成の「聴覚障害者の近親者」については、学年のばらつきがやや見られたが、概ね重複のありなしにかかわらず、「あり」という回答が少なかった。

### 11) 学校歴

学校歴を、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体の42件の回答を学校歴で分類した結果を図6-3aで示し、「重複なし」の1年生17件、2年生16件、3年生2件の回答

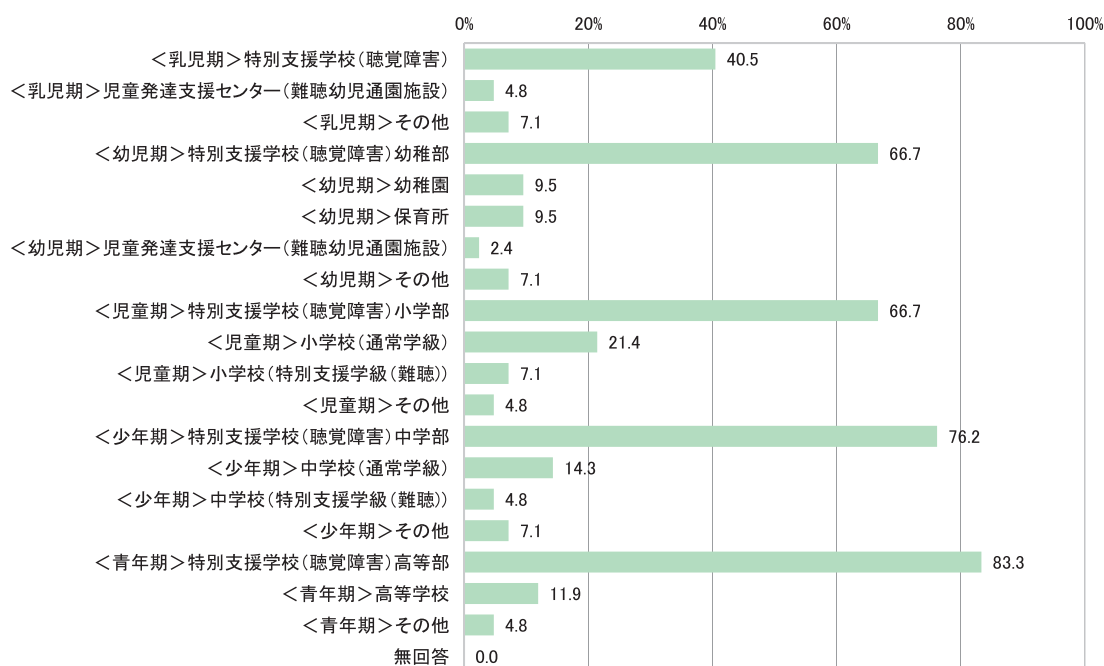


図6-3a 学校歴 高等部専攻科全体

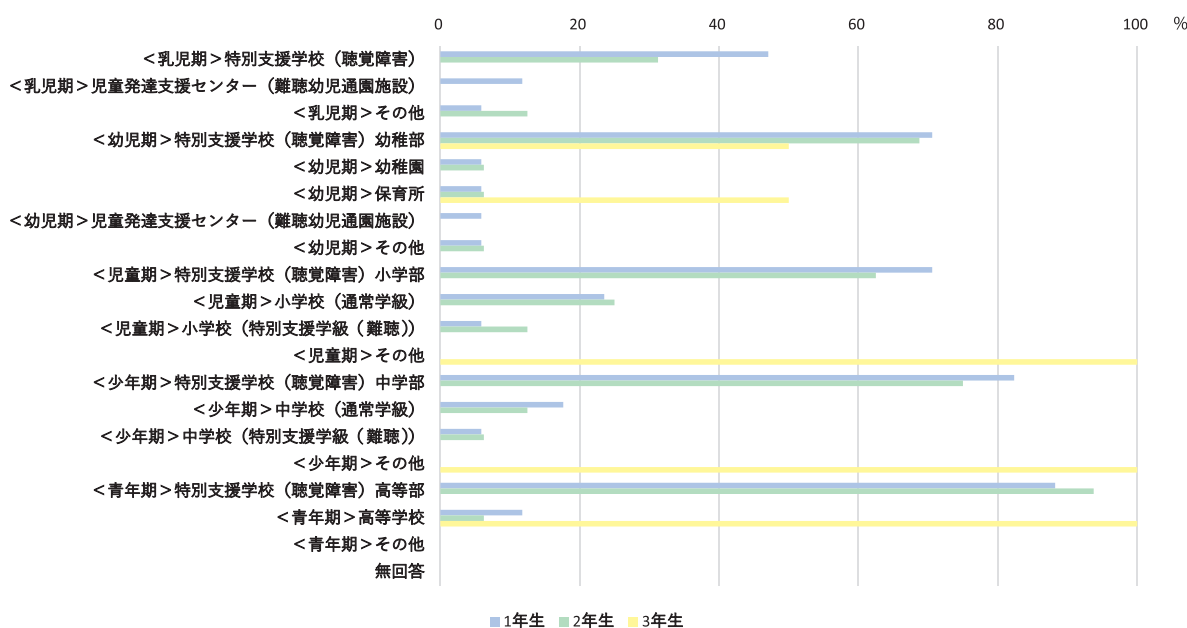


図6-3b 学校歴(重複なし)

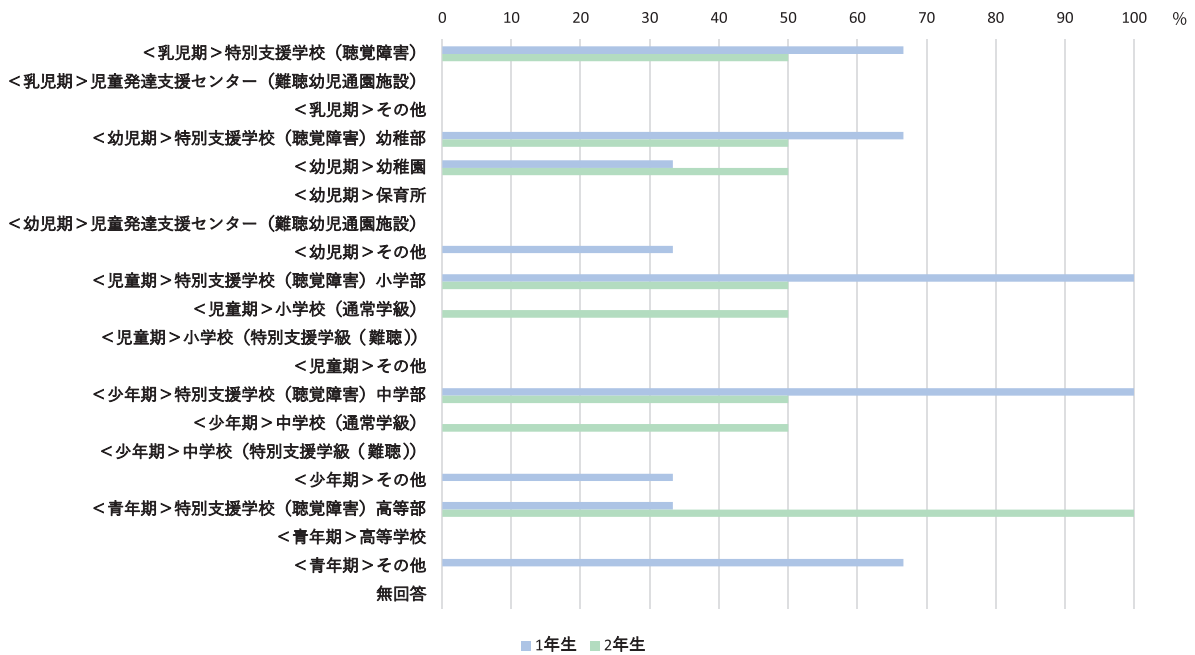


図6-3c 学校歴(重複あり)

は図6-3bに示し、「重複あり」の1年生3件、2年生2件の回答は図6-3cに示した。全体的傾向は、「重複なし」、「重複あり」とともに特別支援学校(聴覚障害)への在籍率が高い。「その他」については、乳幼児期に1件、「重複あり」で福祉施設の回答があり、児童期では、「重複なし」に小学校が2件、少年期では、「重複あり」で、特別支援学校(肢体不自由)の回答が1件、「重複なし」で中学校が2件、青年期では、「重複あり」で、特別支援学校(聴覚障害)と特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科が、それぞれ1件であった。

## 12) 今後の進路

今後の進路について、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部専攻科全体では、42件の回答中、就職が36件と最も多く、全体の86.7%であった。進学は、特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科が1件で2.45%、その他では、専門学校が1件で2.4%であった。進学の合計は、約半数であった。

表6-11に、「重複なし」と「重複あり」の結果を示した。「重複なし」、「重複あり」とともに、いずれの学年でも就職が最も多かった。「重複なし」では、いずれの学年でも就職が多く、「その他」では、就労継続支援A型と大学附属病院歯科技工研修科であった。進学希望では、特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科のみであった。「重複あり」の「その他」は、未定であった。「重複あり」の進学希望先は、特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科のみであった。

以上のことから、高等部専攻科の今後の進路については、「重複なし」も「重複あり」も、ほとんどの者が就職を希望していることがわかった。この傾向は、多様な進学先も視野に入れた進路希望がみられた高等部本科の結果とは、異なるものであった。

なお、「重複なし」と「重複あり」とともに、「特別支援学校小学部」など、義務教育段階の学校を「今後の進路」として回答している例が見られたが、これは分析の対象としなかった。

表6-11 今後の進路の分類と回答数及び割合

		重複の有無		重複なし			重複あり	
		学年	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	
就職・ その他	就職		17 (100)	13 (81.3)	1 (100)	2 (66.7)	1 (50)	
	職業能力開発校		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (50)	
	その他		0 (0)	1 (6.3)	1 (100)	1 (33.1)	0 (0)	
	特別支援学校(聴覚障害)高等部専攻科		1 (5.7)	0 (0)	0 (0)	1 (33.1)	2 (0)	
大学等	高等専門学校		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	筑波技術大学		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	一般大学		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	その他		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	無回答		0 (0)	1 (6.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	

### 13) 聴覚活用の状態について

#### ①音への気付き

「音への気付き」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」73.0%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数である。また「重複あり」では良好とはいえない結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-4a、図6-4b)。

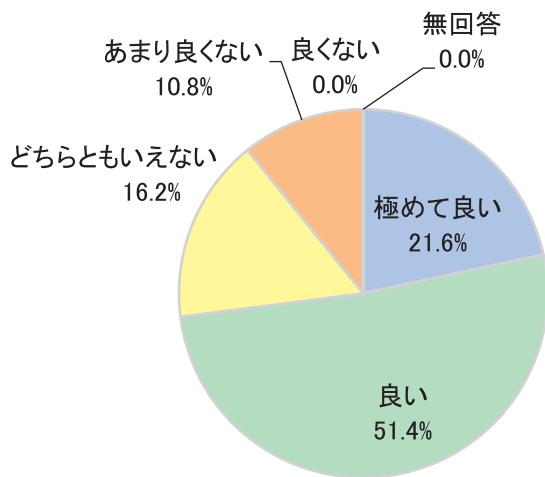


図6-4a 音への気付き (重複なし)

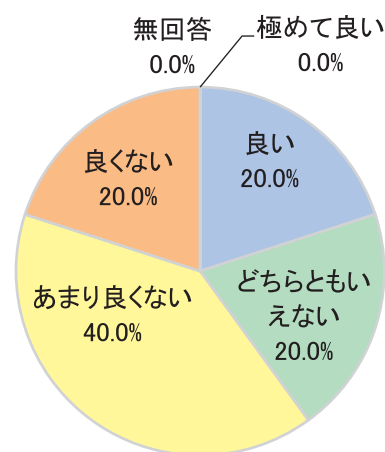


図6-4b 音への気付き (重複あり)

#### ②言語音の聞き取り

「言語音の聞き取り」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」62.2%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数であったが「重複あり」では良好な者は少ないという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-5a、図6-5b)。

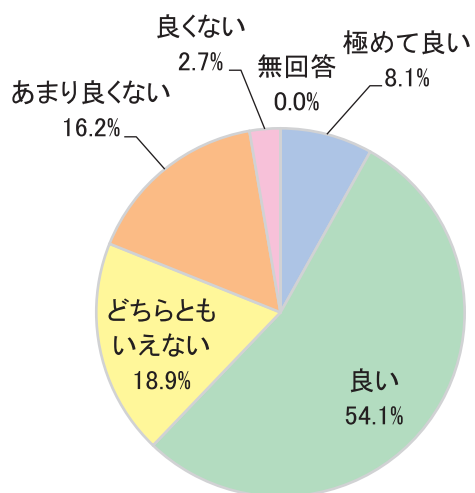


図6-5a 言语音の聞き取り（重複なし）

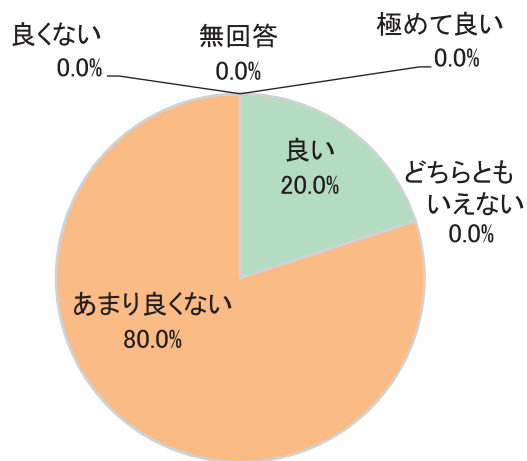


図6-5b 言语音の聞き取り（重複あり）

### ③教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子

「教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子」は、「よくできている」と「できている」を合わせると「重複なし」62.1%、「重複あり」20.0%（「極めて良い」0.0%）であり、「重複なし」では良好な者が過半数であったが「重複あり」では良好な者は少ないという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-6a、図6-6b）。

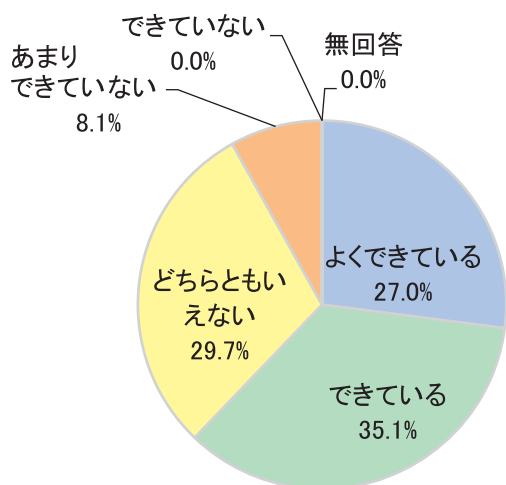


図6-6a 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複なし）

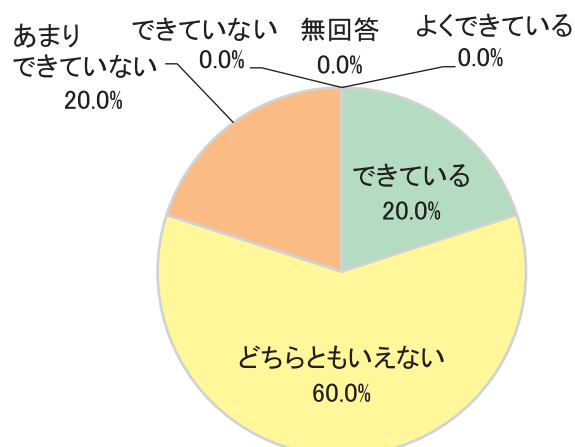


図6-6b 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複あり）

### ④聴覚活用に関する指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、「人工内耳の管理」「聴覚活用」「手話」「日本語」「傾聴態度・行動」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

#### ・「重複なし」

20件の記述があった。

「聴覚活用」について「良好」11件、「課題あり」4件であった。「手話の活用」について

「良好」2件、「課題あり」2件であった。「日本語獲得」は「良好」2件、「課題あり」2件であった。「傾聴態度・行動」について「良好」3件であった。

「重複なし」は「聴覚活用」について良好と思われる。

・「重複あり」

3件の記述があった。

「聴覚活用」について「良好」1件、「課題あり」1件であった。「手話の活用」は2件であった。

14) 言語活動（読み書き）

①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」67.5%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-7a、図6-7b)。

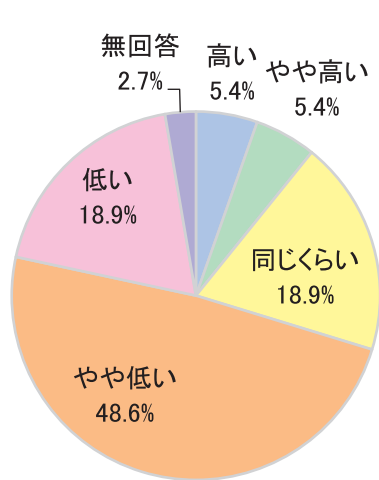


図6-7a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複なし）

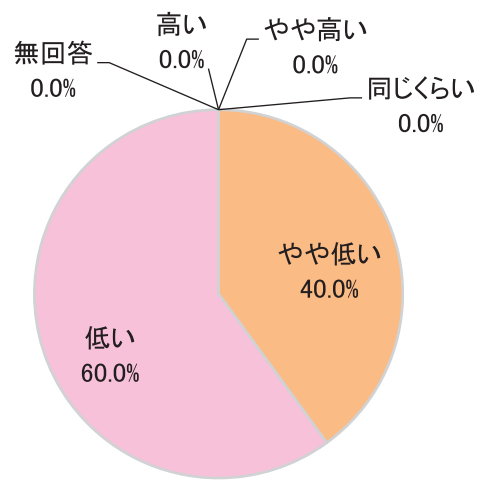


図6-7b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複あり）

②同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力」は、「低い」と「やや低い」を合わせ

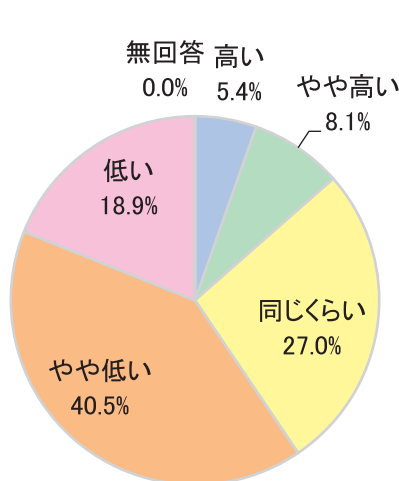


図6-8a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複なし）

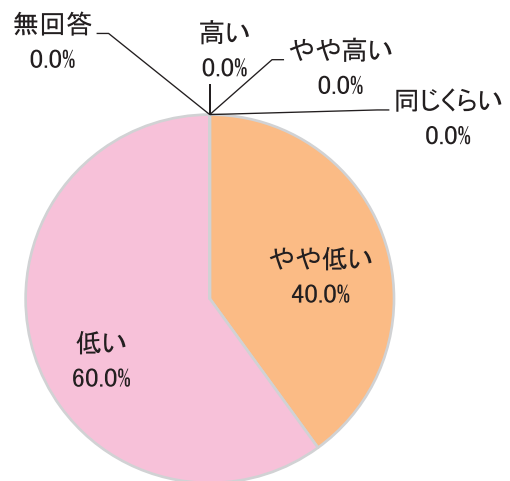


図6-8b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複あり）

ると「重複なし」59.4%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-8a、図6-8b)。

### ③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」48.6%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-9a、図6-9b)。

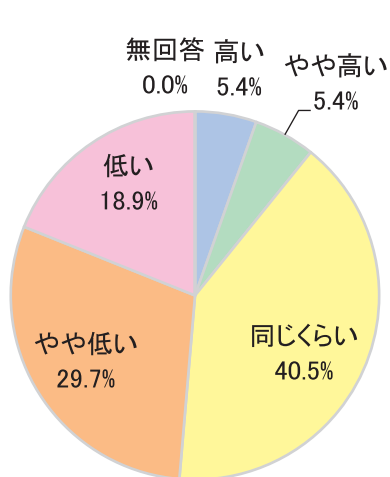


図6-9a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複なし）

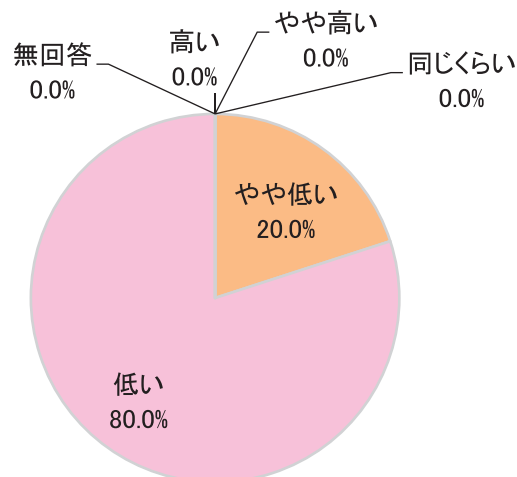


図6-9b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複あり）

### ④同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」64.8%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-10a、図6-10b)。

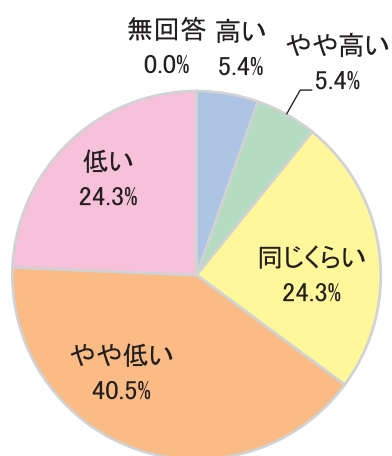


図6-10a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複なし）

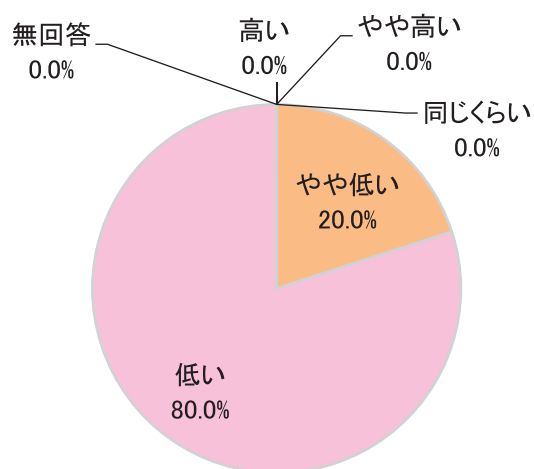


図6-10b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複あり）

## ⑤言語活動に関する指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、「聞く」「話す」「読む」「書く」「語彙」「助詞等」「文法・敬語」「学年相当」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

### ・「重複なし」

13件の記述があった。

「聞く」については「良好」1件、「課題あり」2件であった。「話す」については「良好」3件、「課題あり」3件であった。「読む」については「課題あり」4件であった。「書く」については「課題あり」15件であった。「語彙」については「課題あり」3件であった。「助詞等」については「課題あり」3件であった。「文法および敬語」については「課題あり」4件であった。「学年相当学力」については「課題あり」2件であった。

「重複なし」の「書く」については課題が多いといえる。

### ・「重複あり」

4件の記述があった。

「聞く」については「良好」1件であった。「話す」については「良好」1件であった。「読む」については「課題あり」3件であった。「書く」については「課題あり」3件であった。「語彙」については「課題あり」3件であった。「学年相当学力」については「課題あり」2件であった。

## 5. 対象生徒の学校での学習と生活について

### 1) 学業成績

#### ①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」67.5%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-11a、図6-11b)。

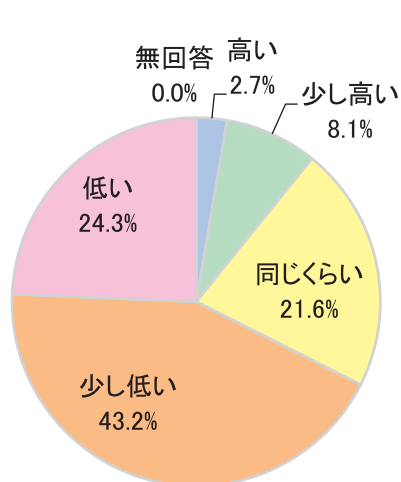


図6-11a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複なし）

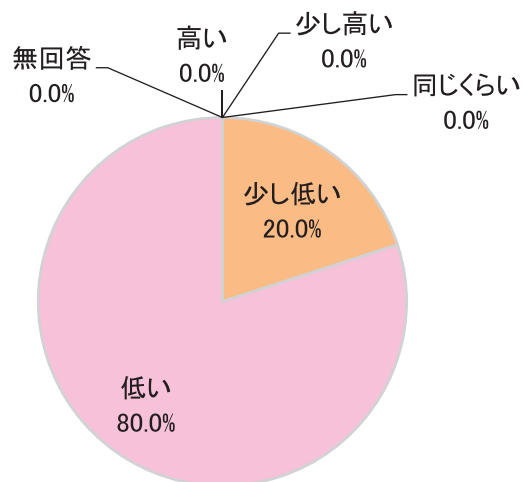


図6-11b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複あり）

## ②潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績

「潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績」は、「比較できないほど低い」と「かなり低い」と「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」72.9%、「重複あり」80.0%であり、どちらも低い者が過半数であった（図6-12a、図6-12b）。

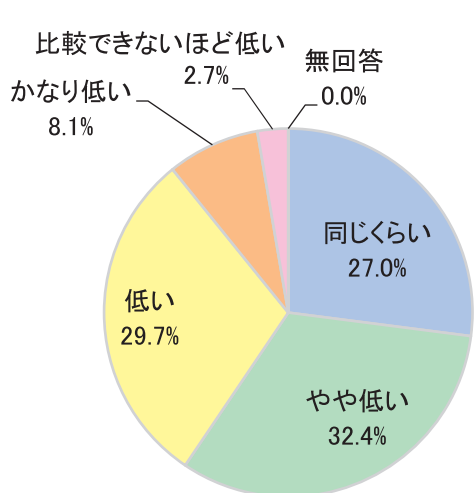


図6-12a 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複なし）

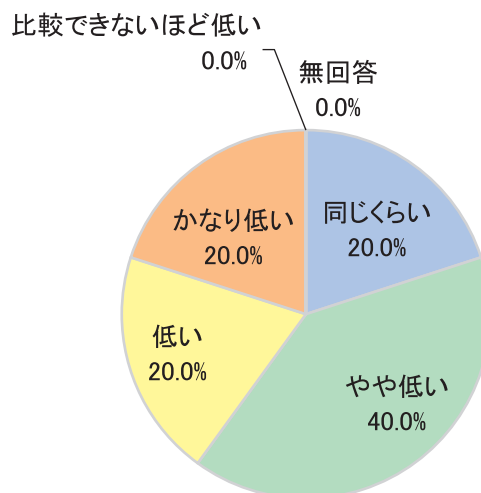


図6-12b 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複あり）

## ③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」59.4%、「重複あり」100.0%であり、どちらも低い者が過半数であったが「重複あり」では低いものが著しく多いという結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（ $n=5$ ）、データに偏りのある可能性がある）（図6-13a、図6-13b）。

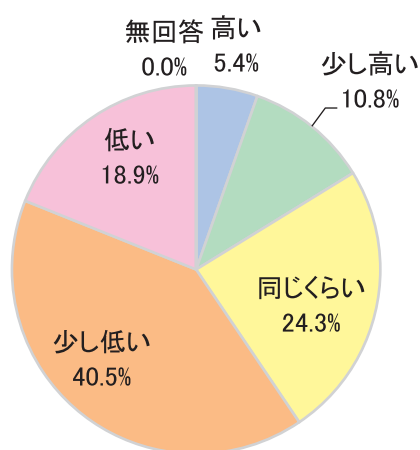


図6-13a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複なし）

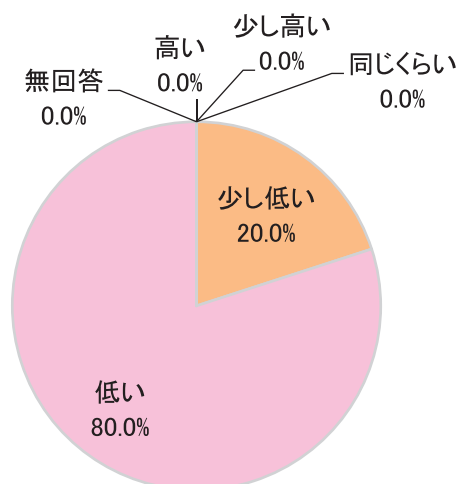


図6-13b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複あり）



#### ④学業成績の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「重複障害」「日本語・学力」「論理・抽象・思考」「学習態度・習慣」「反復学習・定着」「能力対応」「論理・抽象・思考」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「反復学習・定着」「能力に応じた指導」「個別指導」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

##### ・「重複なし」

20件の記述があった。

課題として「日本語・学力」16件、「学習態度・習慣」1件が挙げられ、指導上工夫していることとして「能力に応じた指導」1件、「個別指導」1件の回答内容であった。

「重複なし」における「日本語・学力」は重要課題である。

##### ・「重複あり」

4件の課題に関する記述があった。

課題として、「重複障害」1件、「日本語・学力」2件、「論理・抽象・思考」1件が挙げられ、指導上工夫していることとして、「反復学習・定着」1件、「能力に応じた指導」2件、「個別指導」1件の回答内容であった。

#### 2) 学習態度

##### ①同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度

「同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度」は、「重複なし」では「ほとんどない」32.4%、と「同じくらい」43.2%の2峰性となっているのに対し、「重複あり」では「少し多い」40%が最も多いものの「同じくらい」20%、「少しある」20%、「ほとんどない」20%という結果であった（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りがある可能性がある）（図6-14a、図6-14b）。両者とも、健聴生徒と比べて特に多いというわけではなかった。

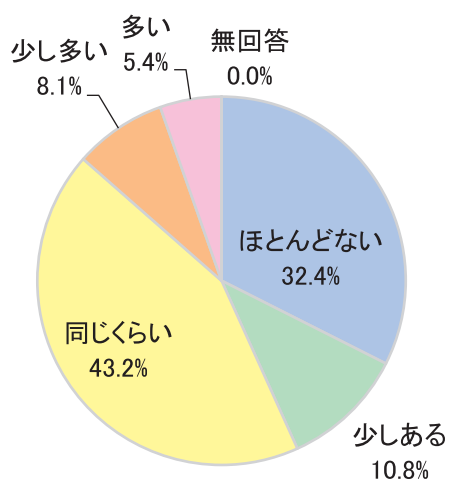


図6-14a 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複なし）

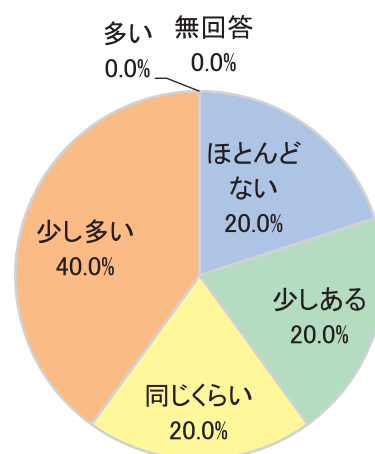


図6-14b 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複あり）

##### ②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間」は、「重複なし」では「同じくらい」54.1%で最も多く、「重複あり」では「短い」と「少し短い」を合わせると80.0%であり、

「重複あり」では注意持続時間の短い者が健聴の生徒に比べて多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-15a、図6-15b）。

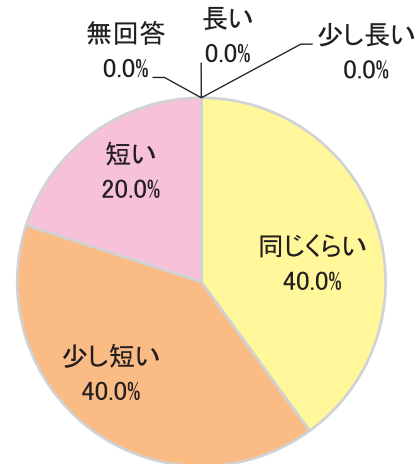
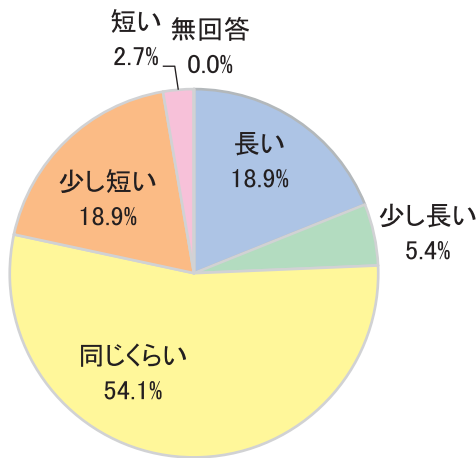


図6-15a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複なし）

図6-15b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複あり）

### ③口頭による指示に対する戸惑いや躊躇

「口頭による指示に対する戸惑いや躊躇」は、「重複なし」では「時々ある（他の子と同じくらい）」45.9%で最も多く、「重複あり」では「多い」と「やや多い」を合わせると80.0%であり、「重複あり」では口頭の指示に対する戸惑いや躊躇のある者が健聴の生徒に比べて多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-16a、図6-16b）。

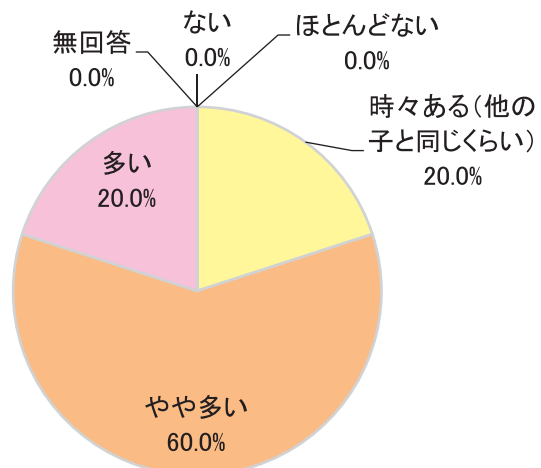
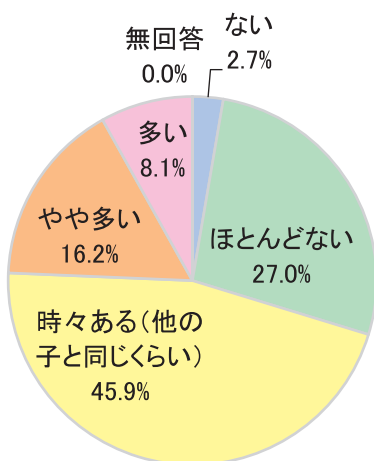


図6-16a 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複なし）

図6-16b 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複あり）

### ④学習態度に対する指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。

課題としては、「集中力」「見通し」「発達障害」、指導上の工夫としては「手話の併用」である。

#### 3) コミュニケーション能力

##### ①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力」は、「重複なし」では

「低い」と「やや低い」を合わせると48.6%で半数弱であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると100.0%であり、「重複あり」ではコミュニケーション能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-17a、図6-17b）。

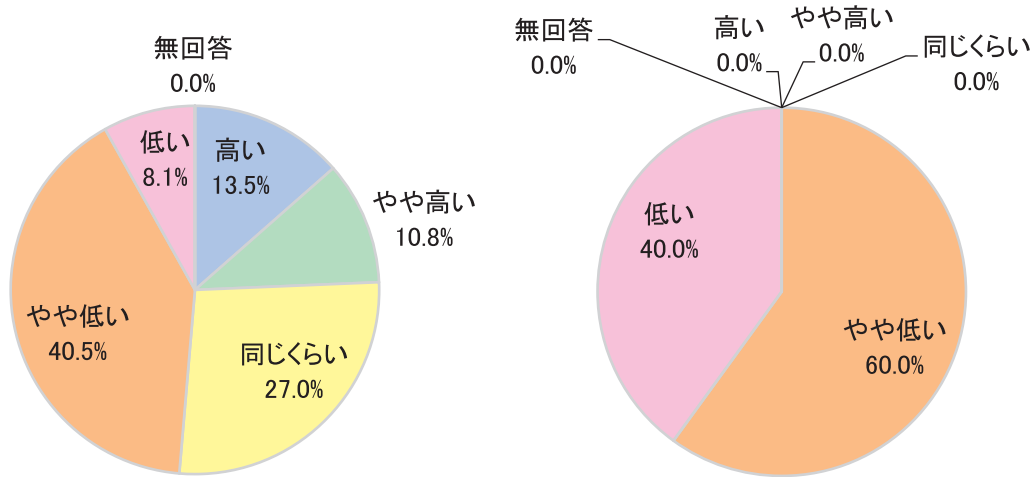


図6-17a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力（重複なし） 図6-17b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力（重複あり）

### ②同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると62.1%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると100.0%であり、「重複あり」では語彙力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-18a、図6-18b）。

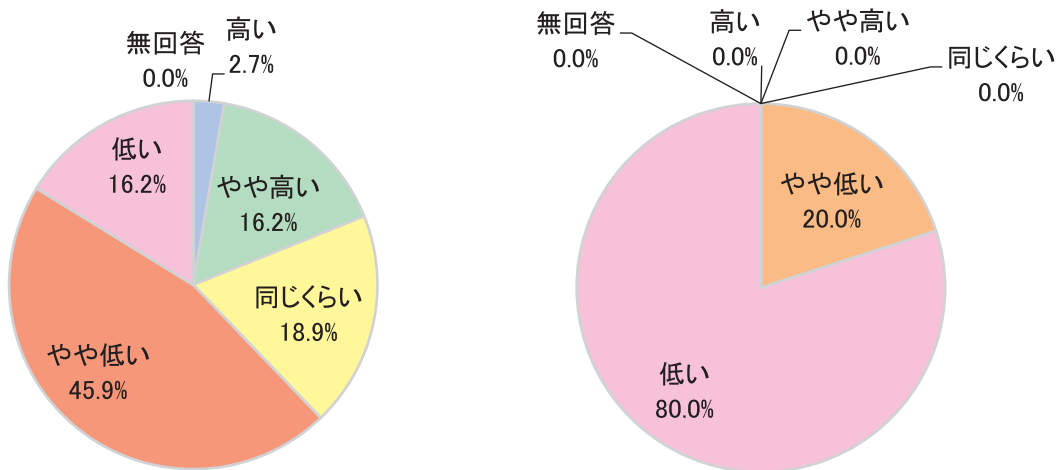


図6-18a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複なし） 図6-18b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複あり）

### ③同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると40.8%であり「高い」と「やや高い」を合わせた18.9%に比べて多いのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると100.0%であり、「重複

あり」では出来事を話す能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-19a、図6-19b）。

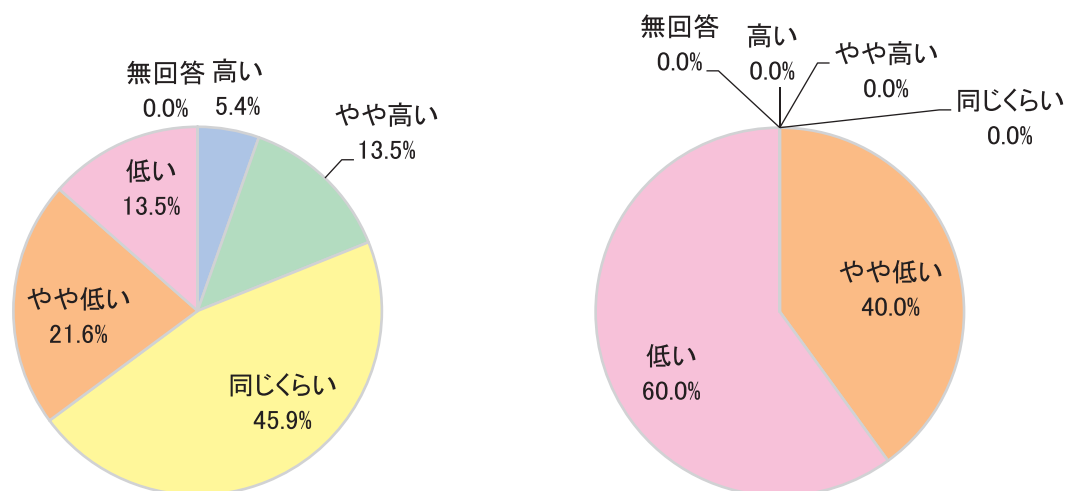


図6-19a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた出来事を話す能力（重複なし） 図6-19b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた出来事を話す能力（重複あり）

#### ④コミュニケーションにおける指導の現状と課題<記述>

主なカテゴリーとしては、課題として「発達障害等」「メタ認知等」「日本語・語彙」「思考・論理」「対人関係」「コミュニケーション経験」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」などの回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

##### ・「重複なし」

21件の記述があった。

課題として「発達障害等」1件、「メタ認知等」1件、「日本語・語彙」9件、「思考・論理」2件、「対人関係」1件、「コミュニケーション経験」3件、であった。指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」7件であった。

以上についてまとめると、「重複なし」において「日本語・語彙」が重要な課題であり、指導上「コミュニケーション指導」が必要といえる。

##### ・「重複あり」

4件の記述があった。

課題として「日本語・語彙」3件であった。指導上工夫していることとして「コミュニケーション指導」1件であった。

#### 4) 学校生活

##### ①教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況

「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は、「重複なし」において「多い」と「やや多い」を合わせると37.8%であり、「少ない」と「やや少ない」を合わせた24.3%に比べて多い。「重複あり」では、「多い」0%、「やや多い」は20%であり、「少ない」と「やや少ない」を合わせた60%に比べて少ない（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-20a、図6-20b）。「重複なし」は、「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は比較的良いといえる。

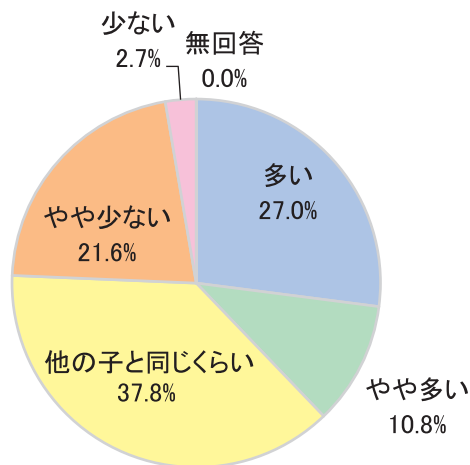


図6-20a 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複なし）

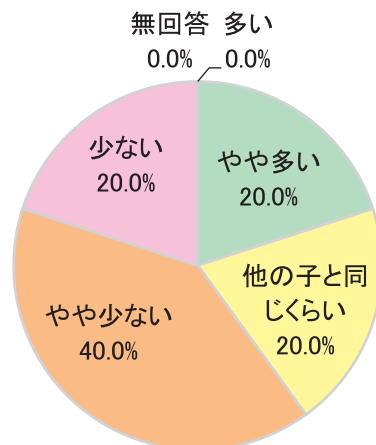


図6-20b 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複あり）

### ②持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況

「持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況」は、「重複なし」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると54.0%であるのに対し、「重複あり」では「常に持参・提出」0%だが、「ほとんど持参・提出」60.0%であり、両者とも良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-21a、図6-21b)。

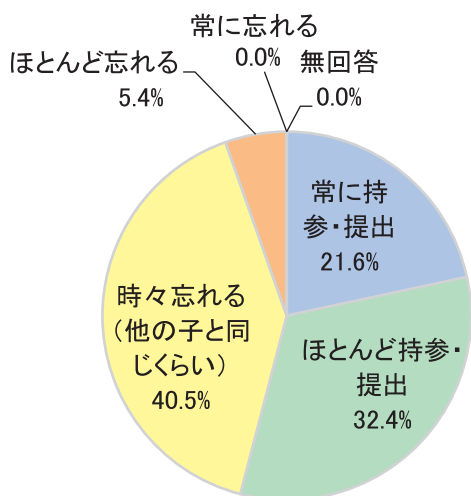


図6-21a 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複なし）

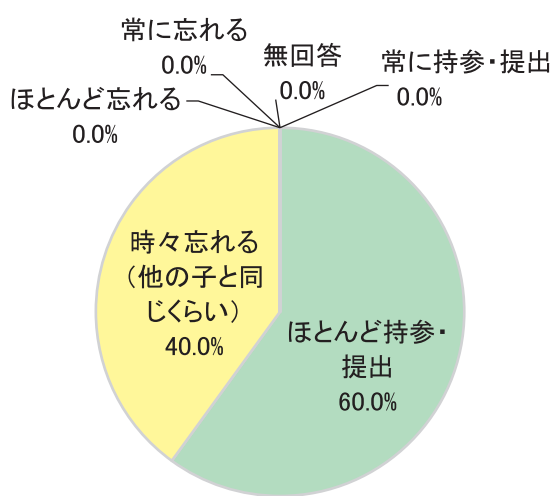


図6-21b 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複あり）

### ③教師の指示の後、課題を遂行することの困難

「教師の指示の後、課題を遂行することの困難」は、「重複なし」では「ない」と「ほとんどない」を合わせると51.3%、「重複あり」では「ほとんどない」60.0%で両者とも過半数であり、良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-22a、図6-22b)。

### ④生活指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。

課題としては、「学習・生活態度」「理解の確認」である。

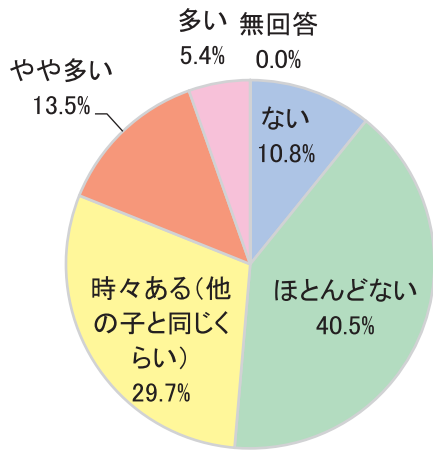


図6-22a 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複なし）

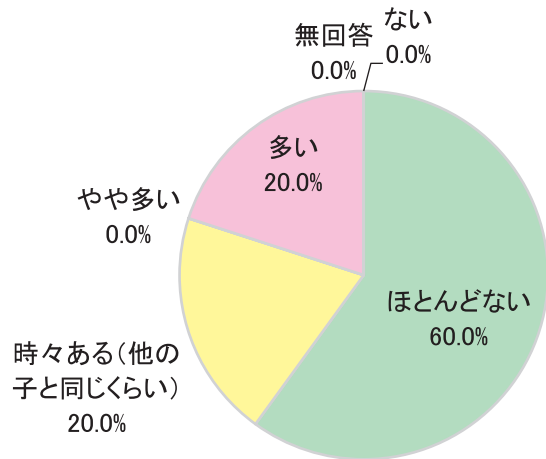


図6-22b 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複あり）

## 5) 学校での行動

### ①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」72.9%「重複あり」60%で過半数を超えており良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-23a、図6-23b)。

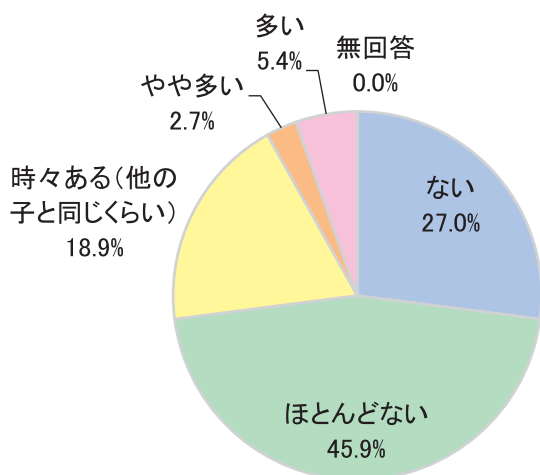


図6-23a 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複なし）

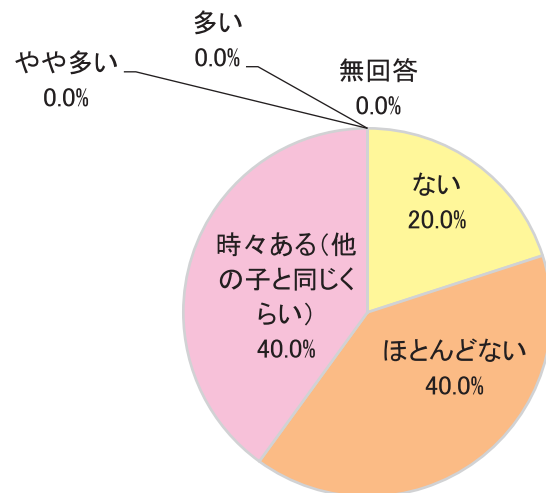


図6-23b 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複あり）

### ②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」64.9%、「重複あり」40.0%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）(図6-24a、図6-24b)。

### ③他の子供たちとの良好な関係の維持

「他の子供たちとの良好な関係の維持」は、「良好ではない」と「あまり良好ではない」を

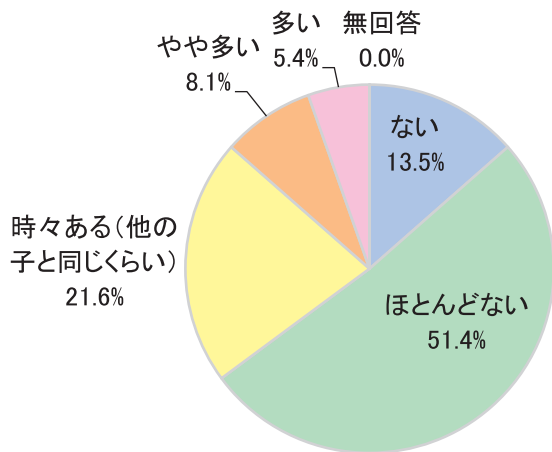


図6-24a 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること(重複なし)

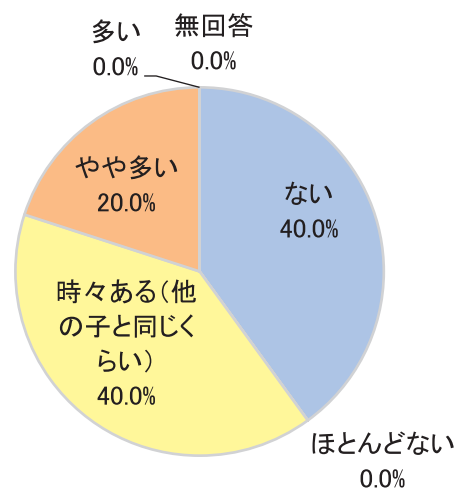


図6-24b 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること(重複あり)

合わせると「重複なし」10.8%「重複あり」20%であり、両者とも良好ではない者は少ないといえる（「重複あり」の対象者が少なかったため（n=5）、データに偏りのある可能性がある）（図6-25a、図6-25b）。

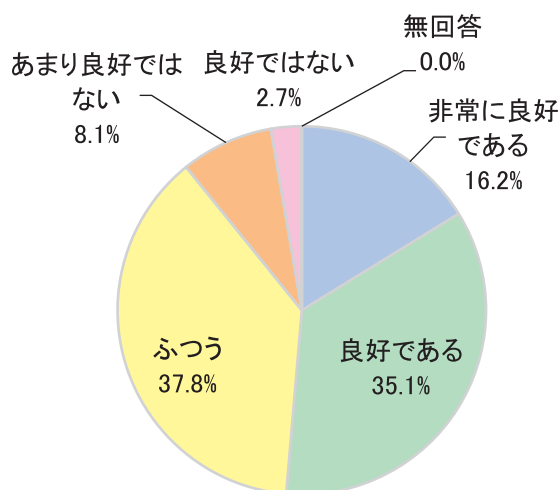


図6-25a 他の子供たちとの良好な関係の維持(重複なし)

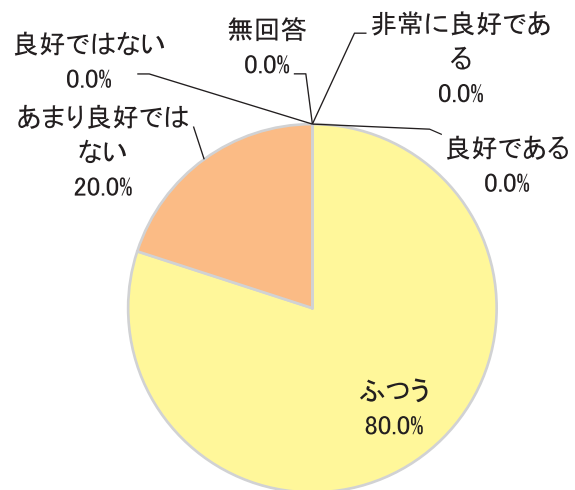


図6-25b 他の子供たちとの良好な関係の維持(重複あり)

#### ④行動に対する指導の現状と課題<記述>

本記述回答は、5件のみであるので、記述内容を要約したもののみ以下に記載する。

課題としては、「メタ認知」「情緒・心理」「対人関係」「常識」、指導上の工夫としては、「対話による理解」である。

## II まとめ

### 1. 調査概要

#### 1) 教員に関する事項について

本調査で対象となった高等部専攻科担当教員の教員経験年数の平均が約8年であり、他の特別支援学校の経験年数も、ほぼ同じであったことから特別支援教育に携わった年数が多い教員が対象であったものと思われる。人工内耳について学習したい内容では、基礎的な内容の研修

を求める割合が高かったことに加え、指導法に対する希望も見られ、人工内耳の教育的活用に関する研修の必要性が示された。

## 2) 生徒の実態について

①高等部専攻科における「重複あり」の対象者は少なかったため (n=5)、データに偏りのある可能性があるが、「重複あり」は「重複なし」に比べて課題は多い可能性がある。

②高等部本科生徒と同様、補聴器装用生徒と比較して人工内耳装用生徒は言語やコミュニケーションにおいて、そのメリットが大きい生徒もいるが、メリットがあまりない生徒もあり、かなりバリエーションがあるようである。人工内耳装用生徒については、そのような個人差の大きさをふまえ、その実態に応じた配慮が重要である。特に「重複あり」においては、聴覚活用の効果が少ない者が多い可能性がある。

③高等部本科生徒と同様、人工内耳装用生徒であったとしても、その聴覚活用や言語発達の程度に応じて、読話、手話や指文字、キューサイン等、多様な手段を利用することが必要である。

④高等部本科生徒と同様、聴能学的には、人工内耳では閾値の下降に伴い、「音への気付き」が良くなっており、これは、傾聴態度の良さに反映されていると思われる。「音への気付き」に比して言語音の聞き取りや言語力、コミュニケーション面、学習面では伸び悩んでいる事例が多い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用している聴覚障害生徒の大きな課題であるといえる。言語音の聞き取りについては、個人差、人工内耳手術前の言語獲得環境、人工内耳の装用時期および装用後の丁寧な言語指導が重要であり、これらはコミュニケーション面や学習面に影響を及ぼすことから、基本的には高等部専攻科の課題というより、早期発見後の乳幼児期からの療育・教育の課題であるともいえる。

⑤高等部本科生徒と同様、特別支援学校（聴覚障害）における生活面・行動面では比較的適応が良い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用する聴覚障害生徒にとって、特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーションに配慮した教育環境（手話や指文字、筆談の使用等）に適応できていることを示していると考えられる。

## 2. 今後の課題

本調査は、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科に在籍する人工内耳装用生徒の実態を明らかにした。多くの項目で、高等部本科と類似した傾向を示したが、いくつか異なる点も見られ、特に進路については、就職がほとんどとなっているが、更に今後は詳細な分析が必要であろう。具体的には、希望する就職先の業種の内訳、就職先選択の理由、進路指導の仕方、就職先を決定するまでの過程などに補聴器装用生徒との違いはあるかどうかという点であろう。また、就職後の就労状態についても調査が望まれる。聴覚障害者は、他の障害種と比較した場合、離職率の高さを指摘されるが、人工内耳装用の聴覚障害者においても同様の傾向が見られるのか関心がもたれ、この点を社会性などの精神発達の実態と関連させながら明らかにすることも重要であろう。